

1 事業名 小学生チャレンジキャンプ

2 必要性

「今後の青少年の体験活動の推進について」（中央教育審議会答申・平成 25 年 1 月 21 日）によると、「心や体を鍛えるための負荷がかからない『無重力状態』『遊びや体験の場などの『本物』をみる機会の減少』『保護者の経済力や学校の判断による『体験格差』」などが青少年の諸課題として取り上げられている。また、「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」

（国立青少年教育振興機構・平成 22

年 10 月 14 日）によると、「小学校高学年から中学生までは地域や家族とのかかわりが大切」など子どもの頃に必要となる体験に関する調査結果がでていいる。さらに、「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」（文部科学省・平成 24 年度）によると、不登校児童生徒数は小学 6 年生では 6,920 人に対し、中学 1 年生では 21,194 人と、中学 1 年生が小学 6 年生のおよそ 3 倍まで増加している。近年、小学校から中学校に進学したとき、環境の変化になじめず、不登校になる「中 1 ギャップ」が問題となっている。

これらを踏まえ、当施設では国立の青少年教育施設として、青少年育成に携わる団体や人材と連携し、青少年の健やかな成長にとって、様々な体験活動を実施することがいかに重要であるかを広く社会や家庭に広めていかなければならない。さらに、そのきっかけづくりとなるような体験活動の機会を提供することも今後より一層求められる。

3 趣 旨

- ・小学生が保護者の力を借りずに様々な活動へ挑戦する。
- ・初対面の仲間との人間関係を構築し、中 1 ギャップに対応できる力を養う。
- ・未知の自然に触れ、自然に対する興味関心をもたせる。

4 後 援

大田市教育委員会

5 連 携 ・ 協 力

大田警察署、和江漁業協同組合、島根県立三瓶自然館サヒメル、三瓶小豆原理没林公園、大田の自然を守る会、野城報徳会、三瓶観光株式会社

6 期 日

<夏編> 平成 25 年 8 月 22 日（木）～8 月 25 日（日）【3 泊 4 日】

<冬編> 平成 26 年 1 月 18 日（土）～1 月 19 日（日）【1 泊 2 日】



7 参加者

- (1) 募集対象・人数
- (2) 参加人数
- (3) 参加者分析

各回小学 5、6 年生 30 名（最大 36 名まで受入可）
<夏編>34 人（応募数 45 人） <冬編>35 人（応募数 44 人）
各回最大 36 名の募集に対して、各回ともに定員を大幅に超える応募があった。参加者の参加地域の内訳は、下表のとおりである。参加者の本事業への参加のきっかけは、「チラシを見て」という回答が最も多かった。また、<冬編>の参加者のうち 15 名が<夏編>から継続しての参加であった。

参加地域	参加人数	
	夏編	冬編
松江市	9	9
出雲市	16	23
雲南市	1	1
大田市	3	1
益田市	1	0
三次市	3	1
広島市	1	0
計	34	35

表 参加者の地域分布

参加形態	人数
夏編からの継続	15
新規	20
計	35

表 <冬編>参加者の参加形態

8 講師等

伊藤 宏 氏（大田の自然を守る会会長）

9 参加経費

<夏編> 8,000 円

（食事代 10 食 5,160 円・シーツ代 200 円・保険料 262 円・T シャツ代 2,000 円・教材費 378 円）

<冬編> 2,500 円

（食事代 4 食 2,100 円・シーツ代 200 円・保険料 100 円・教材費 100 円）

10 事業の内容

(1) 事業の特色

①当施設の法人ボランティアによる企画・運営

本事業は小学校高学年を対象として、前述のねらいのもと実施するものである。当施設では日頃から次代のリーダーとなる青年ボランティアを養成・育成しており、これまで教育事業「さんべ祭」を中心に活躍している。彼らから「子どもたちを対象にしたキャンプを実施してみたい」という意見が多く挙がり、平成 24 年度に子どもゆめ基金体験の風リレーシヨンシップ事業として夏（夏を満喫☆ギュギュっとサマー in さんべ）および冬（冬を満喫☆ギュギュっとウィンター in さんべ）に各 1 泊 2 日の日程で事業を実施したことが本事業設立の発端となり、平成 25 年度は教育事業として実施した。本事業は大学生法人ボランティアである青年の育成もねらって実施するものである。

本事業ではプログラムデザインからチラシの作成、広報活動、事前準備および本番当日までの一連の流れを大学生法人ボランティアが担い、当施設職員はプログラムデザインの際のアドバイスや安全管理などのサポートを行った。

②チャレンジプログラムの設定

本事業のねらいである「小学生が保護者の力を借りずに様々な活動へ挑戦する」を達成するために、参加者である小学生が達成することが比較的困難となるプログラムを＜夏編＞および＜冬編＞それぞれに「チャレンジプログラム」として設定した。＜夏編＞では日本海（和江漁港）から当施設までの約 30km の道のりをグループ単位で歩く「チャレンジウォーク」を、＜冬編＞では当施設と三瓶東の原の往復約 8 km を歩くスキーで移動する「チャレンジスキー」を設定した。

③地域の自然環境や人材を活用

本事業のねらいである「未知の自然に触れ、自然に対する興味関心をもたせる」を達成するために、地元大田（三瓶山）の自然環境に触れることができるプログラムを設定した。＜夏編＞では海（和江漁港）をスタートし、川（静間川および三瓶川）を巡り、山（三瓶山）をめざすプログラムとした。また、「大田の自然を守る会」という地元自然保護団体から講師を招き、大田の自然について机上での学習も行った。＜冬編＞では冬の三瓶山を巡り、生息する動物や自然現象について触れることのできるプログラムを行った。

(2) プログラムデザインと企画のポイント

今回のプログラムデザインのねらいとして、①野外におけるプログラムの充実、②人との関わりを重視したプログラム、③安全性に十分配慮したプログラム構成の 3 つを位置づけた。野外での活動が多く、天候などによって大きく左右されることが予想されるため、プログラムの構成は十分にゆとりを持たせ、急なプログラムの変更にも臨機応変に対応できるようにした。

また、本事業のねらいである「初対面の仲間との人間関係を構築し、中 1 ギャップに対応できる力を養う」を達成する工夫として、活動形態の基本をグループ単位とし、参加者と比較的年齢の近い大学生法人ボランティアをグループリーダーとして各グループに配置するようにした。参加者同士だけの交流だけでなく、参加者と大学生法人ボランティア、参加者と当施設職員、参加者と地域の人材など多方面における異年齢交流が図れるようにも工夫した。

平成 24 年度に実施した子どもゆめ基金体験の風リレーションシップ事業「夏を満喫☆ギュギュつとサマー in さんべ」および「冬を満喫☆ギュギュつとウィンター in さんべ」では、流しそうめんや餅つきなどの日本の伝統文化を味わえるような様々な体験を中心にプログラムデザインを行ったが、本事業においてはこれらを踏まえ、自然と触れ合ったり大きな物事にチャレンジすることで達成感を味わえたりなど、さらに一步深めた体験ができるように心がけた。

参加者に自然に対する興味関心を持たせるために、より身近な自然に触れることができるよう、三瓶山や大田市の自然を題材に取り上げ、山から川、川から海へと自然のつくりに関する一連の流れについて学べるようにした。その手段の一つとして、地域で自然保護活動の分野で活躍する人材に講師を依頼し、写真や標本など机上での学びを野外での活動につなげることが出来るようにした。

また、＜冬編＞の実施時期は当施設周辺道路には積雪があることが予想されたため、参加者の本事業参加に配慮し、JR 出雲市駅と交流の家間の送迎バスを運行した。

(3) 広報のポイント

広報については本事業のチラシを作成し、近隣（松江市・出雲市・雲南市・大田市・三次市）小学校 5・6 年生に対して教育委員会および学校を通じて配付した。また、報道機関には記者クラブを通じてチラシを配付し、広報を依頼した。さらに、昨年度当施設の事業に参加があった対象学年の児童に対してもチラシを配付し、参加を呼びかけた。

(4) 日程表

<夏編>

	8月22日(木)	8月23日(金)	8月24日(土)	8月25日(日)
6:00		起床	起床	起床
7:00		朝食(野外炊飯)	朝食(野外炊飯)	朝食(バイキング)
8:00		テント撤収	テント撤収	キャンプ片付け
9:00		バス移動		
10:00	受付・開会式	日本海から三瓶山へ!	ただいま三瓶!	ふりかえり
11:00	アイスブレイク	チャレンジウォークスタート	～感動のゴール～	
12:00	昼食(バイキング)	昼食(弁当)	昼食(弁当)	昼食(バイキング)
13:00	テント設営		サヒメル見学	閉会式・解散
14:00				
15:00	夕食(野外炊飯)		カプラ	
16:00		テント設営		
17:00	片付け	夕食(野外炊飯)	さよならBBQ(夕食含む)	
18:00			入浴	
19:00	入浴		キャンドルのつどい	
20:00	ふりかえり	ふりかえり		
21:00			ふりかえり	
22:00	就寝(テント泊)	就寝(テント泊)	就寝(セミナーハウス泊)	

<冬編>

	1月18日(土)	1月19日(日)
6:00		起床
7:00		朝食(野外炊飯)
8:00		
9:00		冒険から帰ろう!
10:00	受付・開会式	～ミッションクリアでゴールをめざせ～
11:00	アイスブレイク	入浴
12:00	昼食(バイキング)	昼食(バイキング)
13:00	冒険へ出発しよう!	ふりかえり
14:00	～歩くスキーで東の原をめざせ～	
15:00		閉会式・解散
16:00	テント設営	
17:00	夕食(野外炊飯)	
18:00		
19:00	絆<small>きずな</small>を深めよう! テント泊	
20:00	ふりかえり	
21:00	就寝(東の原でテント泊)	

(5) 内容

① テント泊（夏編・冬編共通プログラム）

野外で宿泊する際の手段としてテント泊を行った。＜夏編＞では悪天候が続き、野外でのテント泊が出来なかったため、室内にテントを設営しての宿泊となった。



はじめてのテント設営



テント完成



雪の上でのテント設営

② 野外炊飯（夏編・冬編共通プログラム）

事業日程の最初と最後の食事を除き、全てを野外炊飯とした。交流の家を離れて活動する際も簡易に調理できるようガスバーナーなどを用いた。



はじめての野外炊飯



「みんなで食べるとおいしいね」



雪の中の食事は保存食

③ 30km チャレンジウォーク「日本海から三瓶山をめざそう！」（夏編プログラム）

日本海から交流の家まで約 30km の道のりを、途中様々な課題をクリアしながら 2 日間に渡って歩いた。大雨洪水警報が発令されたため、ルートを短縮しての実施となった。



出発前の安全上の約束



グループ毎にチームフラッグ作成



「ゴール目指してがんばるぞ」

④ チャレンジスキー「歩くスキーで東の原へ」（冬編プログラム）

交流の家から東の原までの往復 8 km を歩くスキーで歩いた。途中動植物に関するクイズを解いたりチェックポイントを探したりするなどしてゴールをめざした。



はじめての歩くスキー



1 日目ゴール



交流の家到着

(6) 運営のポイント

参加者の人数や行動、体調などを迅速に把握し対応するために6名の小集団グループを構成した。グループ構成に際しては、学年や性別、所属小学校などができる限り同じにならないように工夫した。各グループには大学生法人ボランティアを2名（男女各1名）ずつ配置し、事前に保護者から聞き取りを行った参加者の健康状態や人間関係づくりに際する注意点などを十分に把握した上で指導にあたった。また、児童のみでの参加であるため、予期せぬ事故や病気等に備えて保護者との連絡を迅速に行える体制を整えた。

活動は基本的にはグループ単位とし、グループ内での人間関係構築を第一の目標としてコミュニケーションを図れるようにした。生活面に関する基本的事項については各グループに配置した大学生法人ボランティアが指導し、その他の場面では参加者の自主性・自立性を尊重するよう、「指示」をするのではなく「支援」をすることに徹した。

事業の運営については大学生法人ボランティアが中心となって実施できるよう、職員は安全管理をするとともに必要に応じて助言を行った。交流の家内に実施本部を組織し、スタッフ間の情報の共有については無線および携帯電話を使用した。スマートフォンの情報共有ツールであるLINEも試験的に導入した。

(7) 安全管理のポイント

○施設外且つ野外での活動が中心となるプログラムであるため、活動場所やルート、緊急時の避難場所など数回にわたって事前踏査を行った。また、スタッフとなる大学生法人ボランティアに対しても事前にプログラムの体験や指導法、安全管理など本番を想定したトレーニングを実施した。

○厳しい気候環境下での実施であるため、予期せぬ事故や病気等に備え危機管理マニュアルを作成し、スタッフ全員で共通理解を図った。さらに、活動中には無線や携帯電話を携行し様々な連絡手段を確保した上で応急処置・医療機関対応担当者を設定し、救急鞆を携行し事故やけがなどの緊急時に備えた。

○大田警察署および大田市立病院など近隣の公的機関と密に連絡・連携を図り、緊急時に迅速な対応ができるようにした。

○事業実施前に参加者の保護者に対してアレルギーや既往症などを調査するために事前調査カードを提出してもらった。また、実施当日の受付時には直接保護者から参加者の当日の健康状態を聞き取るなどして参加者把握に努めた。さらに、事業実施中は参加者用のしおりに「体調チェック表」を設け、健康状態を把握した。

○事業実施日は<夏編>で非常に強い大雨、<冬編>で大雪といった悪天候の中での実施となった。このため実施本部では注意報および警報など天候を常に把握し、スタッフと密に連絡を取り合うことで安全管理に努めた。

○<夏編>においては一般道を歩く場面が多く危険が伴うため、「チャレンジウォークのときに注意すること」をしおりに掲載し、参加者に安全についての指導を行った。また、歩道がない場所においては、車で参加者を先導するなどして安全確保に努めた。

(8) アンケートの満足度・主な記述

<夏編>

①参加者アンケート

満足度（参加者34名中） 満足32名（94.1%） やや満足2名（5.9%）

- 初めての体験ばかりだったけど班のみんなと協力できた。
- 初めて出会う友達だったけどすぐに仲良くなれてよかった。ボランティアの大学生もすごく優しくておもしろかったし話しやすかった。雨が降ってプログラムが変更になったけど変更したプログラムもすごく楽しかった。すごく楽しい3泊4日だったのでまた冬の三瓶でボランティアの方や三瓶の方と会いたい。
- 班の人は全員知らない人だったけど、みんなと仲良くなれたのでうれしかった。
- ボランティアの人はとても優しくていろいろと気にかけてくれた。とても頼りがいのある人たちばかりでうれしかったし、楽しかった。来てよかったので冬も来たい。

②保護者アンケート

- 今回のような体験は子どもの中のいろいろなスイッチを押してもらえる、殻を破ることができる、新しい自分にも気づく等、実り多い時間を経験させて頂きました。
- 今回の体験で子ども達はひとまわり大きくなり、思い出をたくさん作り、別れは名残惜しいのに家に帰ると「家族っていいな」と思えるそんな時間となったことでしょう。

③法人ボランティアアンケート

- 子どもとの関り方、声かけの仕方など普段の大学の講義では学べないことを多く学べた。
- 事業の最後に子ども達から「本当に楽しかった」や「冬のキャンプも絶対に参加したい」という言葉がもらえたことが本当に嬉しかった。子ども達の活動する姿をイメージしながら企画を進めたが、当日は不備も多くあり、反省点も多かった。

<冬編>

①参加者アンケート

- 満足度（参加者 35 名中） 満足 33 名（94.3%） やや満足 2 名（5.7%）
- たくさんの「初めて」があって、全てが楽しかったのでとてもよかった。
 - テント泊は寒かったけど根性がついた。
 - ボランティアや知らない人とも仲良くできてよかった。中学生になってもこういうキャンプがあればまた来たいと思った。
 - 初めてキャンプに参加したけどみんなと仲良くできたし、歩くスキーではみんなと協力して4km歩けたのでよかった。次は夏のキャンプにチャレンジしたい。
 - 今まではキャンプなどに参加したことがなく、行く気もなかったけれど、もうすぐ中学生になるのでもっと積極的になろうと思ひ参加した。キャンプはとても楽しかった。ここで学んだことをこれからの生活に活かしたい。
 - 今年6年生なので最後のキャンプで残念だけど、これまで参加した中で一番だった。中学生の企画もしてほしいと思った。

②保護者アンケート

- 親と離れての体験なので、自分のことは自分でする力や意見をしっかりとという力は育つと思います。電気や水道などの文明の力を使わない体験は子ども達をたくましく育ててくれると思います。
- 大学生という自分に近い年齢の大人にリーダーシップをとってもらうことがとても新鮮で憧れにもなっているようです。
- 初めてのところに自分1人でいくことができ、仲間を作り、協力し支えられ、助け合う体験はいつか迎える自立への準備となると思います。やりたいことに向かう気持ちと実行力、どこでも誰とでも協調しながら自分を主張できる力などは今回のようなキャンプでないと身に付けられない、親の手の中で与えてやることのできないものだと思います。

③法人ボランティアアンケート

- 大学生ボランティアを中心に企画運営をしていく本事業では、企画の難しさやスタッフ間の情報共有、意見の集約など難しく大変なことがたくさんあった。特に私はリーダーとして悩むことも多かった。しかし、自分達で企画を作り上げていくやりがいや皆で成功という目標に向かっていくことで生まれる絆、そして、成功したときの達成感は私たちを大きく成長させてくれた。
- これまで自分がしてきたボランティア活動で身に付けた知識・技術や物事の考え方・捉え方が良い方向に変わったと思う。今回の経験は1年間の中で最も充実したものになった。

11 成果と今後の課題

<成果>

- 各回ともに募集人数を上回る応募があった。また、<冬編>の参加者の約半数は<夏編>の参加者であったことから本事業の有意性がうかがえる。
- 参加者アンケートによると、「すごく楽しい3泊4日だったのでまた冬の三瓶でボランティアの方や三瓶の方と会いたい」や「次は夏のキャンプにチャレンジしたい」などの肯定的な意見が数多くあり、参加者に対して有意義な体験の場を提供できた。
- 事業の運営に際しては、予期せぬ事故や病気等に備え危機管理マニュアルを作成して実施したこともあり、急な天候の変化や参加者の体調不良等にも迅速に対応できた。
- 参加者が本事業に参加しやすくなるよう、JR出雲市駅と交流の家間の送迎バスを設定した。参加者の多くはこれを活用し、保護者アンケートにも「送迎バスがあったから子どもを参加させようと思った」などの記述もあり、その効果は大きかった。
- 本事業の企画・運営は当施設の大学生法人ボランティアが中心となって実施した。事業実施後の法人ボランティアアンケートによると、「ミーティングにスタッフがなかなか集まらない状況や意見がなかなか集約できないこともあり事前の準備がすごく大変だった」や「様々な状況を想定して企画を考えたこともあり、当日の急な天候不良などにも臨機応変に対応することができた」などの意見があり、長期間にわたっての企画や当日の運営を通して彼ら自身も大きく成長できた。
- 地域の様々な団体と避難場所の確保や講義など、様々な形で連携協力することで、より高い教育効果が得られた。

<課題>

- 施設外且つ野外での活動が中心となるプログラムであり、また、厳しい気候環境下での実施であるため、予期せぬ事故や病気等に備え危機管理マニュアルを作成し、応急処置・医療機関対応担当者を職員の中から設定し実施したが、より体制を強化するために次年度以降実施する際は、専門の医療関係スタッフを配置することも考慮する必要がある。
- JR出雲市駅と交流の家間の送迎バスを設定し、効果もあったが、特に積雪のある冬季については広島方面からの参加者にも対応できるようにバス送迎の設定が求められる。
- 平成25年度は<夏編>と<冬編>の関連を持たせず、それぞれ独立させて実施したが、継続的に青少年を育成していく観点から、次年度以降は<夏編>と<冬編>で関連を持たせ、年間を通して事業を展開してことも求められる。
- 本事業のねらいである「初対面の仲間との人間関係を構築し、中1ギャップに対応できる力を養う」を達成するための手段として、実際に中学生との交流ができるプログラムを設定するなど、より教育効果の高いプログラムを検討していくことが求められる。

12 普及計画・普及実績

ホームページ上に要項や事業の様子などを掲載することで事業内容を社会に広く周知することができた。また、地方新聞1社、日本教育新聞および大田市のケーブルテレビが事業の一部を取材後に報道し、取組を広く広報することができた。

(担当 藤江 龍)